

健康な小児が抱くがん，白血病のイメージについて

古 谷 佳由理（千葉大学大学院看護学研究科博士後期課程）

本研究の目的は，健康な小児ががんや白血病といった病名からどのようなイメージを抱くのか，自分が大きな病気になったとしたら，病名や治療などについて教えて欲しいと思っているのかを明らかにすることである。千葉県内の小中高校に通っている小学校5年生から高校3年生までの児童生徒1964名から得られたアンケートの回答を，統計ソフト SPSS にて分析を行い以下の結果を得た。

1. 健康な小児が抱くがんのイメージは，「死ぬ・治らない」「重い・危険・苦しい」といった悲観的なものが多く，全体の約65%を占めていた。「聞いたことがない・わからない」と答えたものもあり全体の約15%であり，どの学年でも同様の傾向であった。
2. 健康な小児が抱く白血病のイメージは「病態や特徴について」「原因や治療について」といったものが，全体の約38%を占めていた。「聞いたことがない・わからない」と答えたものは全体の約33%を占め，小学生では半数以上が「聞いたことがない・わからない」と答えていた。
3. 自分が病気になったときにされる説明については小学生の80%，中学生の85%，高校生の91%が真実を伝えられることを求めている。その理由として自分の知る権利，治療に前向きに取り組めるといった姿勢の向上，知らないことが不安になる，残された命を有意義に悔いのないように過ごしたいといったものがあげられていた。

KEY WORDS : image of cancer, image of leukemia, truth telling, child

I. はじめに

小児がんの治療の飛躍的な進歩によって，小児がん患者の約60%が治癒する時代を迎えている。それに伴い学校への復学問題や小児がん長期生存者の晩期障害といった新たな問題が生じており，小児がん患者に対する病名告知は成人のがん患者に対する病名告知と同様避けて通ることのできない大きな問題として注目されている。小児がん，特に白血病はすでに慢性疾患の一つとなりつつあるが，小児がん患者に対して病名告知を行うことの利点として，社会生活に適応しやすいこと^{1) 2)}，危険行動の回避³⁾などが明らかにされてきている。また，実際に病名告知をされた小児がん患者は，病名そのものに対してのこだわりはほとんどないと言われている⁴⁾。しかし，実際には小児がん患者に対する病名告知はいまだに積極的に行われていない⁵⁾。その理由の一つに，小児が抱くがんのイメージの不確かさがある。一般的に小児は大人と違った認識を持っており，白血病やがんといった病名を聞いても大人ほどショックを受けないと言われている⁶⁾。しかし，実際の小児ががんや白血病に対してどのようなイメージを持っているのかは，明らかにされて

いない。そのため，大人ほどショックを受けないとは言われていても，小児がこのようなイメージを持っているからショックを受けないということを具体的に説明することができない。それが明確にされなければ病名告知をした際に小児がん患者がどのような反応をするのか，ショックを受けて自殺をしてしまうのではないかとといった親の不安は軽減されず，その結果小児がん患者に対して病名を伝えないといった親の行動につながっている⁷⁾。

そこで今回健康な小，中，高校生ががんや白血病に対してどのようなイメージを抱いているのか，そのイメージの情報源は何であるのかを明らかにすることを目的として本研究を計画した。

II. 研究目的

健康な小児が抱いているがんや白血病のイメージを明らかにする。

III. 研究方法

1. 用語の定義

1) イメージ

イメージは「ある言葉を聞いたときにその言葉から連想するもの」とする。

2) Truth Telling

Truth Telling は「本当の病名や治療方法など自分の病気についての真実説明」とする。

2. 研究対象

地域の普通校に通っている小学校5年生から高校3年生までの児童生徒，1学年約200名を対象とする。

3. 研究場所

千葉県内の小学校2校，中学校3校，高等学校1校。

4. 研究の手順

千葉県内の小，中，高校を対象としてアンケート調査を実施したが，千葉県教育委員会に対象となる学校の選定を依頼をした。まず，教育委員会に研究の趣旨を説明し，事前に教育委員会の担当者にアンケート内容の検討を依頼し，修正を行った。その後さらに各学校の養護教諭にも同様に内容の検討を依頼し，各学年ごとに使用する漢字や文章表現を修正し，児童生徒によりわかりやすい表現に修正した。プレテストは，小学生用のアンケートを小学校4年生5名，5年生3名を対象に行い，質問内容の理解，文章を読むことができるかなどアンケートに回答可能であることを確認した。

千葉県教育委員会から紹介された学校の校長，教頭，もしくは養護教諭に研究の趣旨を説明し，研究の協力が得られた際には，アンケートを窓口となる先生を通じて依頼し，2～3週間後，回収に訪問した。アンケートは各学校で時間のとれるときに実施してもらった。その際各クラスの担任からアンケート用紙を配布してもらい，その場で記入，回収を依頼した。アンケート依頼時期は1997年6月から7月にかけてであった。

5. 分析方法

アンケートの回答方法は選択肢と自由記述の部分があ

り，選択肢のものは選択番号をデータとし，自由記述のものは研究者がコード化してからデータとして用いた。コード化は研究者自身がはじめにコード化したものと1ヶ月後に再度コード化したものと比較し，一致率は92%であった。分析は統計ソフト SPSS を用いた。

IV. 結 果

1. 対象の背景

対象となった小児は，小学5年が209名（男子106名，女子103名），小学6年が191名（男子103名，女子88名），中学1年が219名（男子108名，女子111名），中学2年が192名（男子102名，女子90名），中学3年が212名（男子105名，女子107名），高校1年が313名（男子139名，女子174名），高校2年が289名（男子164名，女子125名），高校3年が339名（男子185名，女子150名，性別未記入4名），全体で1964名であった。

本人が覚えている限りでの入院経験のある者は562名（男子338名，女子222名，性別未記入2名）であった。

2. がんについての知識の有無

「がんという病名を聞いたことはあるか」という質問の回答を表1に示した。1938名が「ある」と答え，全体の98.7%を占めていた。その情報源について重複回答で答えてもらったが，テレビやラジオが1748名（90.2%）と最も多く，次いで家族が1113名（57.4%），新聞が1017名（52.5%）などであった。学年による回答結果の違いは認められなかった。

3. がんのイメージ

がんという病名を聞いたことがある1938名について「がんはどのような病気だと思うか」と尋ね，その質問の回答を表1に示した。「死ぬ・治らない」が最も多く

表1 がんについての知識とイメージ

がんについての質問項目	学年 選択肢	全体 (n=1964)	小学生 (n=400)	小学校		中学生 (n=623)	中学校			高校生 (n=941)	高校		
				5年生 (n=209)	6年生 (n=191)		1年生 (n=219)	2年生 (n=192)	3年生 (n=212)		1年生 (n=313)	2年生 (n=289)	3年生 (n=339)
がんという病名を聞いたことがあるか	ある	1938	391	200	191	616	216	192	208	931	309	287	335
	ない	26	9	9	0	7	3	0	4	10	4	2	4
どこで聞いたか（重複回答）	テレビやラジオ	1748	331	160	171	576	202	177	194	841	284	261	296
	家	1113	175	94	81	420	141	127	152	518	189	145	184
	新聞	1017	109	50	59	399	136	120	143	509	171	159	179
	本やマンガ	600	61	24	37	260	77	74	109	279	106	73	100
	学校の授業	533	58	5	53	136	51	24	61	339	143	71	125
がんはどのような病気だと思うか	死ぬ・治らない	825	162	84	78	251	88	84	79	412	137	137	138
	重い・危険・苦しい	444	109	65	44	152	51	41	60	183	65	50	68
	病態や特徴について	219	48	22	26	74	26	26	22	97	37	21	39
	早期なら治るが発見が遅いと死んでしまう	137	12	4	8	36	9	11	16	89	24	19	46
	原因や治療について	57	12	6	6	26	9	7	10	19	3	13	3
	聞いたことはあるがわからない	256	48	19	29	77	33	23	21	131	43	47	41

825名(42.6%)であり、具体的回答例は『助けようがない病気(小学6年)』『死んでしまった逸見さんがなった病気(中学1年)』であった。次いで「重い・危険・苦しい・痛い」が444名(22.9%)と多く、具体例は『治りにくく大変な病気(中学1年)』『苦しい(高校2年)』であった。次いで「病態や特徴について」が219名(11.3%)であり、具体例では『胃や肺になにかができてしまう病気(小学5年)』『しつこく取り除いても違ふところに転移する(高校1年)』などであった。「早期なら治るが発見が遅いと死んでしまう」が137名(7.1%)、「原因や治療について」が57名(3.0%)、「聞いたことはあるがわからない」が256名(13.2%)であった。

すべて学年において、死ぬ・治らない、重い・危険・苦しいといったイメージが多く、各学年とも6割以上を占めており、学年ごとの大きな違いは認められなかった。「聞いたことはあるが分からない」と答えた者は小学生で12%、中学生で13%、高校生で14%であった。

4. がんについての質問経験と答えてもらった内容

がんについての質問経験と答えてもらった内容について表2に示した。「がんがどのような病気か尋ねたことがあるか」という質問に対して546名(27.8%)が「ある」と答えていた。学年別では小学生が32.8%と尋ねたことのある割合が最も多く、中学生が31.8%、高校生が23.1%と学年が高くなるに連れて質問経験が少なくなっていた。また性別では、男子が222名、女子323名と女子の方が尋ねたことがある人が多かった。

尋ねた相手は母親が最も多く440名(80.1%)、父親が247名(45.2%)、友人39名(7.1%)などであった。全学年において母親に尋ねた者が最も多く、父親に尋ねた

者の割合は小学生が最も多かった。性別では、男女とも母親が最も多く(男子163名、女子276名)、次いで父親であった。女子で父親に尋ねた者は約40%であったが、男子では半数以上の54%が父親に尋ねていた。

「がんについてどのように答えてもらったか」という質問の回答は「死ぬ・治らない」110名(20.1%)、「病態や特徴について」76名(13.9%)、「重い・危険・苦しい」72名(13.2%)などであり、「聞いたことはあるが忘れてしまった」203名(37.2%)であった。小学生では「死ぬ・治らない」が最も多く、中学生では「死ぬ・治らない」「重い・危険・苦しい」が同数であり、高校生では「死ぬ・治らない」「病態や特徴」が多かった。

5. 白血病についての知識の有無

「白血病という病名を聞いたことはあるか」という質問の回答を表3に示した。1759名が「ある」と答えており、全体の89.6%を占めていた。その情報源について重複回答で答えてもらったが、がん同様テレビやラジオが1548名(88.0%)と最も多く、次いで家族が649名(36.9%)、新聞が638名(36.6%)などであった。

学年別では小学5年では約半数が、小学6年では約4分の1が聞いたことがないと答えていた。中学1年では9割以上が聞いたことがあると答え、それ以上ではほとんどの者が聞いたことがあると答えていた。知識の情報源については学年による違いは認められなかった。

6. 白血病のイメージ

白血病という病名を聞いたことがある1759名について「白血病はどのような病気だと思うか」と尋ね、その質問の回答を表3に示した。「病態・特徴について」が491名(27.9%)と最も多く、具体例では『出血が止まらな

表2 がんについての質問経験と答えてもらった内容

がんについての質問経験	学年	全体 (n=1964)	小学生 (n=400)	小学校		中学生 (n=623)	中学校			高校生 (n=941)	高校		
				5年生 (n=209)	6年生 (n=191)		1年生 (n=219)	2年生 (n=192)	3年生 (n=212)		1年生 (n=313)	2年生 (n=289)	3年生 (n=339)
がんがどのような病気か 誰かに尋ねたことがあるか	ある	546	131	72	137	198	61	64	73	217	70	56	91
	ない	1418	269	59	132	425	158	128	139	724	243	233	248
誰に尋ねたか(重複回答)	母親	440	109	61	48	155	46	50	59	176	56	46	74
	父親	247	72	37	35	84	20	29	35	91	26	26	39
	友人	39	3	0	3	16	8	3	5	20	8	4	8
	きょうだい	33	6	1	5	12	5	1	6	15	4	4	7
	先生	15	1	0	1	6	3	1	2	8	2	2	4
がんはどのような病気だと答えてもらったか	死ぬ・治らない	110	41	24	17	34	13	10	11	35	13	10	12
	重い・危険・苦しい	72	19	13	6	34	13	9	12	19	6	5	8
	病態や特徴について	76	18	9	9	27	3	16	8	31	8	9	14
	早期なら治るが発見が遅いと死んでしまう	5	1	0	1	1	0	1	0	3	0	2	1
	原因や治療について	51	14	7	7	15	3	2	10	20	8	7	5
	身内がかかった病気	18	1	1	0	7	2	1	4	10	5	0	5
	聞いたことはあるが忘れた	203	37	18	19	76	27	23	26	90	27	23	40

くなくなったりする(中学1年)』『血の中に悪い白血球が大量にできて免疫効果がなくなる病気(高校3年)』であった。次いで「原因・症状・治療について」が264名(15.0%)と多く、具体例では『放射能による病気(中学3年)』『血液中の白血球が多すぎて障害となる病気、HLA抗体が合うドナーが必要(中学2年)』『骨髄移植をして治す病気、骨髄バンクがある(中学1年)』などであった。次いで「死ぬ・治らない」が252名(14.3%)で、具体例では『必ず死ぬ(中学3年)』『白血球がなくなりウイルスに対しても抵抗力がなくなり風邪とかにかかっても死んでしまう、お相撲の蔵間さんがそうだった(中学2年)』であった。「重い・危険・苦しい」が218名(12.4%)で、具体例は『わからないが怖い病気(中学1年)』

『重病(高校2年)』であった。「血液のがん」が92名(5.2%)、「早期に発見すれば治るが発見が遅ければ死ぬ」が7名(0.4%)であり、「わからない」が435名(24.7%)であった。白血病のイメージはがんとは違い、白血球の病気や免疫能力がなくなるといった「病態や特徴について」と、放射能を浴びるとなるや骨髄移植をするといった「原因や治療について」が最も多かった。

学年別では「病態や特徴について」「原因や治療について」が小学生では25%前後、中学生・高校生では40%以上を占めていた。「血液のがん」と答えた者を学年別に見ると小学生が4%、中学生が29%、高校生が67%であった。「聞いたことはあるがわからない」と答えた者はがんよりも多く、小学生で29%、中学生で20%、高校

表3 白血病についての知識とイメージ

白血病についての質問項目	学年 選択肢	全体 (n=1964)	小学生 (n=400)	小学校		中学生 (n=623)	中学			高校生 (n=941)	高校		
				5年生 (n=209)	6年生 (n=191)		1年生 (n=219)	2年生 (n=192)	3年生 (n=212)		1年生 (n=313)	2年生 (n=289)	3年生 (n=339)
白血病という病名を聞いたことがあるか	ある	1759	261	114	147	583	196	179	208	915	305	279	331
	ない	205	139	95	44	40	23	13	4	26	8	10	8
どこで聞いたか(重複回答)	テレビやラジオ	1548	198	86	112	530	180	162	188	820	268	249	303
	家	649	71	25	46	256	73	76	107	322	113	87	122
	新聞	638	31	11	20	257	82	71	104	350	106	105	139
	本やマンガ	567	65	22	43	208	54	59	95	294	107	85	102
	学校の授業	356	29	4	25	93	22	17	54	234	85	51	98
白血病はどのような病気だと思うか	死ぬ・治らない	252	34	10	24	88	21	30	37	130	45	33	52
	重い・危険・苦しい	218	40	20	20	83	23	20	40	95	27	30	38
	病態や特徴について	491	83	41	42	194	72	62	60	214	77	62	75
	早期なら治るが発見が遅いと死んでしまう	7	0	0	0	2	2	0	0	5	0	1	4
	原因や治療について	264	23	10	13	75	27	22	26	166	50	56	60
	血液のがん	92	4	0	4	27	5	10	12	61	17	23	21
	聞いたことはあるがわからない	435	75	30	45	114	46	35	33	244	89	74	81

表4 白血病についての質問経験と答えてもらった内容

白血病についての質問経験	学年 選択肢	全体 (n=1964)	小学生 (n=400)	小学校		中学生 (n=623)	中学校			高校生 (n=941)	高校		
				5年生 (n=209)	6年生 (n=191)		1年生 (n=219)	2年生 (n=192)	3年生 (n=212)		1年生 (n=313)	2年生 (n=289)	3年生 (n=339)
白血病はどのような病気か誰かに尋ねたことがあるか	ある	384	64	21	43	143	33	51	59	177	52	54	71
	ない	1580	336	188	148	480	186	141	153	764	261	235	268
誰に尋ねたか(重複回答)	母親	289	33	10	23	113	30	35	48	141	43	45	53
	父親	151	38	17	21	60	12	22	26	53	13	17	23
	友人	47	3	1	2	16	4	4	8	28	10	9	9
	きょうだい	31	1	0	1	16	6	4	6	14	4	3	7
	先生	20	5	0	5	6	1	1	4	9	3	2	4
白血病はどのような病気だと答えてもらったか	死ぬ・治らない	29	4	1	3	16	4	7	5	9	3	3	3
	重い・危険・苦しい	20	3	2	1	7	2	1	4	10	1	4	5
	病態や特徴について	90	20	10	10	38	10	16	12	32	13	7	12
	早期なら治るが発見が遅いと死んでしまう	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	原因や治療について	62	8	2	6	19	5	4	10	35	10	14	11
	血液のがん	34	2	0	2	12	1	6	5	20	6	5	9
	聞いたことはあるが忘れた	147	27	6	21	51	11	17	23	69	18	23	28

生で27%であった。

7. 白血病についての質問経験と答えてもらった内容

白血病についての質問経験と答えてもらった内容を表4に示した。「白血病がどのような病気か尋ねたことがあるか」という質問に対して384名(19.6%)が「ある」と答えていた。学年別では小学生が16.0%と尋ねたことのある割合が最も少なく、中学生が23.0%、高校生が18.8%であった。また性別では、男子が152名、女子231名と女子の方が尋ねたことがある人が多かった。

尋ねた相手は母親が最も多く289名(75.3%)で、次いで父親が151名(39.3%)、友人47名(12.2%)などであった。小学生では母親と父親に対して同じように尋ねていたが、中学生、高校生になると母親が最も多かった。性別では、がん同様男女ともは母親が最も多く(男子102名、女子185名)、次いで父親であった。女子で父親に尋ねた者は約30%であったが、男子では半数以上の51%が父親に尋ねていた。

「白血病についてどのように答えてもらったか」との質問に対しては「病態や特徴について」が90名(23.4%)、「原因や治療について」が62名(16.1%)、「血液のがん」が34名(8.9%)、「死ぬ・治らない」が29名(7.6%)などであった。また「聞いたことはあるが忘れてしまった」と答えた者が147名(38.2%)であった。

8. 自分が病気になったときの Truth Telling について の考え方

「もし病気になったとしたら、どんな病気でも病気の名前や治療の方法など本当のことをきちんと教えて欲しいか」という質問の回答を表5に示した。1701名(86.6%)が「教えて欲しい」、194名(9.9%)が「教えて欲しくない」、69名(3.5%)が「わからない」と答えた。

性別や入院経験による特徴は認められなかった。

教えて欲しい理由として最も多かったのが「自分のことだから・嘘をつかれたくない・知る権利がある」で527名(31.0%)であった。具体例を上げると『自分が何の病気で苦しんでいるのかが分からないといや(中学2年)』『他人の話から自分の耳に入ったらショック(高校1年)』『嘘をつかれて死ぬよりも本当のことを教えてもらって死んだ方が良い(小学5年)』であった。次いで「病気と闘う・治療に前向きに取り組める」が多く、438名(25.7%)であった。具体例では『自分が知らないことと立ち向かえない(中学1年)』『私も何回か入院したけど自分がどういう病気か知って治せるようになっていく気持ちになれた。知らなかったら不安になると思う(高校2年)』であった。「今後や将来のことを考えられる」が349名(20.5%)、具体例は『残った人生を楽しみたい(高校1年)』『やり残したことがないように、悔いの残らないように生きる(中学3年)』であった。次いで「知らないことと不安・気になる」が290名(17.0%)で、具体例は『親にそのことで一人で悩んで欲しくない(小学6年)』『死ぬことよりも知らない方がもっと不安(中学1年)』であった。また「なんとなく知りたい」が97名(5.7%)であった。小学生では「病気と闘う・治療に前向きに取り組める」が最も多く、中学生では「自分のことだから・嘘をつかれたくない・知る権利がある」「病気と闘う・治療に前向きに取り組める」が多く、高校生では「自分のことだから・嘘をつかれたくない・知る権利がある」「今後や将来のことを考える」が多かった。

教えて欲しくない理由として最も多かったのが「知ると怖い・知らない方が楽」で151名(77.8%)であった。その具体例は『重い病気だと知ったらガンと思う。知

表5 自分が病気になったときの Truth Telling について考え方

自分が 病気になった時	学年 選択肢	全体 (n=1964)	小学生 (n=400)	小学校		中学生 (n=623)	中学校			高校生 (n=941)	高校		
				5年生 (n=209)	6年生 (n=191)		1年生 (n=219)	2年生 (n=192)	3年生 (n=212)		1年生 (n=313)	2年生 (n=289)	3年生 (n=339)
病気になる病名などを きちんと教えて欲しいか	教えて欲しい	1701	323	167	156	526	174	167	185	852	284	264	304
	教えて欲しくない	194	68	37	31	77	35	23	19	49	18	11	20
	わからない	69	9	5	4	20	10	2	8	40	11	14	15
教えて欲しい理由													
自分のことだから・知る権利がある		527	88	47	41	150	42	45	63	289	93	94	102
病気と闘う・治療に前向きに取り組める		438	108	54	54	168	61	51	56	162	59	52	51
今後や将来のことを考える		349	49	25	24	98	34	29	35	202	63	51	88
知らないことと不安・気になる		290	66	34	32	86	27	37	22	138	50	54	34
何となく知りたい		97	12	7	5	24	10	5	9	61	19	13	29
教えて欲しくない理由													
知ると怖い・知らない方が楽		151	55	28	27	58	26	19	13	38	14	6	18
知っても仕方がない・気にならない		19	6	3	3	10	6	1	3	3	1	2	0
何となく知りたくない		24	2	1	1	9	3	3	3	8	3	3	2

らない方が死ぬまで普通に生きられる（小学6年）』『治らない病気だとしたら生きようとする気持ちがなくなる（小学5年）』などであった。「知っても仕方がない・気にならない」が19名（9.8%）で、具体例では『医者に任せしかない（中学1年）』であり、「何となく知りたくない」が24名（12.4%）であった。全学年とも「知ると怖い・知らない方が楽」が最も多かった。

V. 考 察

1. がんのイメージについて

がんについては小学校5年生以上の小児ではほとんどの者が聞いたことがあった。しかし、その病名だけから受けるイメージは成人が抱くような「不治の病」「苦痛」「死」といった暗いイメージ⁸⁾だけではなく、腫瘍ができるや手術をするといったものもあげられていた。また、「聞いたことがない・よくわからない」が、約15%でありイメージ形成が確立されていないことが分かった。

今回、一番年齢の低い小学校5年生で「がんは死ぬ病気」や「がんは重い病気」のイメージが最も高かったが、これは有名人のがんによる死亡がマスコミに大々的に報道されていることの影響であると思われる。また、小学生が最も高い割合でがんという病気を尋ねた相手に親を選んでいたことも上記のイメージ形成に大きな影響を与えてと思われる。中学生・高校生になるとテレビのドキュメントやタバコの害などと結びつけた授業などがあり、小学生よりも詳しい情報を得ることができ、がんのイメージを膨らませることができるのではないだろうか。しかし、いずれにしても大人もしくはマスコミといった社会からの情報に大きく影響を受けていることがわかった。小児でもがんという病名からは悲観的なイメージを抱く者が多く、その病名から死や不治の病を連想していた。しかし、そのイメージ形成はまだ十分には確立されていないことが成人との違いであると考えられる。

また、人に尋ねたことのある経験では学年では小学生がその割合が最も高く、性別では女子が男子よりも多かった。また、女子では母親に男子では父親に対して尋ねることが多く、子どもたちは同性の親に対して自分の抱いている疑問を表出しやすいということが推測された。

2. 白血病のイメージについて

白血病という病名については、がんほどは知られてはいなかった。また、血液のがんといったイメージも小学生ではほとんど持っていない状況であり、中学生、高校生と年齢が高くなるに連れて、白血病は血液のがんというイメージを抱くようになっていた。小学校4年生から中学校3年生を対象としたアンケート調査でも、白血病

について知っているとは回答したのは全体の半数以下であったという報告⁹⁾があり、本調査でも同様の結果であった。

白血病に対してもマスコミからの情報がそのイメージに大きく影響していた。ただ、白血病というと最近では骨髄バンク推進のCMが流れていたり、骨髄移植のドキュメントなどがテレビでも放映されており、がんのイメージのような悲観的なイメージは非常に少なかった。

また、小学生では白血病という病名を「聞いたことがない・どんな病気か知らない」と回答した者が半数以上を占めていた。白血病という言葉すら知らなかったので親に白血病について尋ねた者も中・高校生に比較して少なく、どのようなイメージを抱くかというよりは知識を持っていないということが明らかとなった。

以上のことから白血病になった小児に対して白血病という病名を伝えた場合、先入観がなくショックを受けないことは容易に予測される。病名を伝え、それとともに正しい病態や治療方法、予後などの知識を伝えることで偏見や予備知識に邪魔されることなく、正しい知識がそのまま患者の知識として吸収されると考えられる。

3. Truth Telling について

1997年に20歳以上の成人、約3000人を対象に毎日新聞社世論・選挙センターの主催で行われたがん告知についての世論調査¹⁰⁾では、がんにかかったとしたら治る見込みのあるときは86%が、治る見込みのないときは69%が告知をして欲しいと答えている。これに対して今回のアンケート調査では治る見込みのあるなしに関わらず尋ねているが、小学生では約80%が、中学生では約85%が、高校生では約91%が教えて欲しいと答えていた。これは成人の場合と比較しても高い割合であり、子どもだから本当のことを知らなくても良い、また知りたくないだろうという図式はあてはまらない。むしろ、子どもだからこそ、真実が伝えられることでその真実をありのまま受け入れていくことができると考える。自由記述で教えて欲しい理由を尋ねたが、「自分のことだから・知る権利がある・嘘をつかれたくない」といった自分の権利を主張していたり、「明らかにされることで病気と闘う気持ちができ、治療に前向きに取り組めるといった姿勢ができる」「知らないことによって不安になり、気になったりする」と答えており、重い病気になったからといって即、死を連想していないことも小児の特徴である。学年が高くなるにしたがって、成人と同様¹⁰⁾に「残された命を有意義に過ごしたい、悔いのないように過ごしたいから教えて欲しい」と答えた者が増えていた。これは物事の考え方が大人と同じようになってきているからではあるが、割合から見ると小児は成人以上に Truth Telling

を求めていることが伺われる。健康な小中学生を持つ親を対象として自分の子どもが病気になったときの病名告知を調査した報告⁹⁾があるが、がんでは約60%、白血病では約55%の親が子どもには病名を教えたくないと答えていたという結果であり、本研究で対象となった子どもたちの回答とは全く違ったものであった。子どもだから話さなくても良いだろうとか、わからないだろうといった考えは単なる大人の勝手な思いこみに過ぎない。子どもだからこそ大人の言ったことを信じ、それが嘘だとわかったときのショックはより大きなものとなると思われる。子どものことを思って本当のことを隠すといった大人の思いやりは、時として子どもたちの心を傷つけるものになってしまう。また、少数ではあったが隠されて親に気を使われたくないと答えた者もあり、大人が思っている以上に小児の考えはしっかりとしており、周囲に対する思いやりを持っていることも明らかになった。

VI. 結 論

本研究によって小児が抱くがんや白血病についてのイメージや Truth Telling についての考え方が明らかとなった。がんという病名からは苦痛や死を連想する場合もあるが、成人のように悲観的なものばかりではなかった。また、白血病についてはその名前すら知らない小児もあり、それは学年が低い方が全く知識を持たないという状況であった。仮にこのような小児が病気になった場合その病気の正確な知識を早期から提供することで、先入観もなく正しい知識が患者自身に吸収され则认为、早期から病名を含んだ正しい知識提供が必要であると考えられる。また、Truth Telling については成人以上に素直に自分の権利を主張しており、子どもに病名を伝えるのはかわいそうだという大人の思いやりは、小児自身にとっては逆効果であることが明らかとなった。

VII. おわりに

今後はこの結果を小児がん患者に対して病名告知を行う際の資料として活用し、子どもに対する病名告知に不安を抱いている親の不安を軽減し、小児がん患者本人が望んでいる Truth Telling が行われるような看護援助を行っていきたい。

本研究は公益信託山路ふみ子専門看護研究教育助成金により助成を受けて行ったものです。心より深く感謝するとともにここにお礼申し上げます。

<引用文献>

- 1) Slavins, A. L., O'Malley, E. J., Koocher, P. G., and Foster, J. D.: Communication of the cancer diagnosis to patient impact on long-term adjustment, *American Journal of Psychiatry*, 139: 179-183, 1982.
- 2) 小澤美和, 高橋和浩, 阿部世紀, 柴田理恵, 真部淳, 草川 功, 細谷良太, 今井純好, 遠藤紀雄: 小児悪性疾患患児における治療経過中の心理変化, *日本小児科学会雑誌*, 101(2): 522, 1996.
- 3) Hollen, P. J., and Hobbie, W. L.: Decision making and risk behaviors of cancer-serviving adolescents and their peers, *Journal of Pediatric Oncology Nursing*, 13(3): 121-134, 1996.
- 4) 本郷輝明: 小児白血病の診断・治療とケア; 白血病児への病気説明, 病状説明, 小児看護, 20(3): 314-318, 1997.
- 5) 吉本桃子, 小林道弘, 稲葉實人, 堀浩樹, 東 英一, 駒田美弘, 桜井 實: 小児白血病研究会 (JACLS) 参加施設への「病名告知」についてのアンケート調査, *小児がん*, 35(3): 377, 1998.
- 6) Pinkerton, R. C., Cushing, P., and Sepion, B.: *Childhood Cancer Management-A Practical Handbook*, CHAPMAN HALL MEDICAL, 1994.
- 7) 前川喜平, 牛島定信, 星順隆編: 小児がん患者への精神的ケア-実践報告を中心として-, 日本小児医事出版社, 1995.
- 8) 小池眞規子: 問題解決能力への信頼, *ターミナルケア*, 5(3): 182-187, 1995.
- 9) 小林道弘, 稲葉實人, 吉本桃子, 堀浩樹, 東 英一, 駒田美弘, 桜井 實: 健常児とその親における病名告知に対する意識について-アンケート結果より-, *小児がん*, 35 (3): 377, 1998.
- 10) 97年「高齢化社会」全国世論調査報告書, 毎日新聞社世論・選挙センター (協力: アメリカンファミリー生命保険会社), 1998.

A STUDY OF THE IMAGES OF CANCER AND LEUKEMIA IN HEALTHY CHILDREN

Kayuri Furuya

Doctoral Candidate, Graduate School of Nursing, Chiba University

KEY WORDS :

image of cancer, image of leukemia, truth telling, child

The purposes of this study were to identify the images of healthy children on cancer and leukemia, and the way of thinking of truth telling with disease.

The number of subjects were 1964. They belonged to between the fifth grade of primary school and the third year in high school. They answered some item-questionnaire, and the answers were analyzed using SPSS.

The results were as follows:

1. Sixty-five percent of the images of cancer were pessimistic, like "death or incurable" and "serious or painful". About fifteen percent were having no images.
2. Thirty-eight percent of the images of leukemia were "the feature" and "the cause or the treatment". About thirty-three percent were having no images.
3. Truth telling was desired by eighty percent of students of primary schools, eighty-five percent of junior high schools and ninety-one percent of a high school. The reasons were "the rights to know", "to be patient with treatments", "to become more anxious without truth telling", and "to live the remaining days without regrets".